

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

近鉄奈良線学園前駅の北側すぐの新興住宅地の中に、「地蔵山」という小さな山がある。登ると上は平らで、住宅の海に浮かんだ船のようだ。北には4本の石柱に支えられた笠石の下に、摩滅しながらも優しげな表情が残る地蔵が南面している。舟形光背に高浮彫りの座像だ。東側には、石灯籠や石仏も並んでいる。1647(正保4)年地蔵や1759(宝暦9)年の西国三十三度順礼碑もある。1716(享保元)年の地蔵には「二名村住人」が発願したことが刻まれている。この地は富雄駅北側を中心とした近世の二名村の

一部だった。昭和30年代初めの住宅開発で周囲は一変したが、もとから住んでいた学園新田町の人々は地蔵講を作り、今も祀り続けている。

今年は8月20日に数珠繰りが行なわれた。ゴザの上に車座になって婦人や子供も含めて30人ばかりが、真剣なそして楽しそうな面持ちで、15分ほど数珠を回した。

この地蔵山の地蔵は單体ではなく、実は古くからある。1647(正保4)年地蔵や1759(宝暦9)年の西国三十三度順礼碑もある。1716(享保元)年の地蔵には「二名村住人」が発願したことが刻まれている。この地は富雄駅北側を中心とした近世の二名村の



ゴザの上で車座になって行われた数珠繰り
—奈良市の地蔵山で、筆者提供

争乱伝える地蔵道

ている（「学園前の地蔵と馬借道」「奈良歴史ファイル」創刊号1996）。奈良町の北部、東大寺転書門からまっすぐ西に走る道は一条街道と呼ばれるが、法華寺・西大寺から菖蒲池・学園前を経て、富雄川を越えて生駒に達し、さうに大阪北部と続く。奈良と京都大阪を結ぶ道の一つだったわけだ。富雄から生駒へ越えて今は途切れているが、今日は途切れているが、平城宮跡西の道の真中など、要所要所に今も地蔵

が祀られている。地蔵道とでも呼びたいが、この道には歴史的背景が付随している。「馬借」は、鎌倉時代末から現れる物資運搬の交通労働者で、土一揆の先鋒でもあった。県北部では西大寺・秋篠・鳥見(富雄)・生駒などがその拠点であった。鳥見や生駒でも起つていて、この道を富雄で「馬道」だと耳にしたが、点々と地蔵が配された消え消えの道は、中世の争乱を今に伝える交易の道でもあった。

(奈良民俗文化研究所代

表)